

マルチデバイス時代のWebサイト設計指針

—適応力の高いWebサイト構築に必要な3つの概念—

スマートフォンやタブレット端末の急速な普及により、Webサイト閲覧環境が多様化している。モバイル端末向けのWebサイトには、これまでのようなPC向けのWebサイトを基準とした設計をそのまま当てはめるわけにはいかない。本稿では、閲覧環境の特性に合わせたコンテンツ表現が求められるなかで、今後どのようにしてWebサイトを設計するべきか提案する。

Webサイトのスマートデバイス対応

スマートフォンの市場シェアが急速に拡大を続けている。携帯電話の年間販売台数に占めるスマートフォンのシェアは、2011年度には50%を超え、2016年度には70%（利用台数では50%）に達するという。2009年度には販売台数が10%を下回っていたデバイスが数年のうちに主流となる激しい変化が今、起きている。（野村総合研究所『ITナビゲーター2012年版』東洋経済新報社刊）

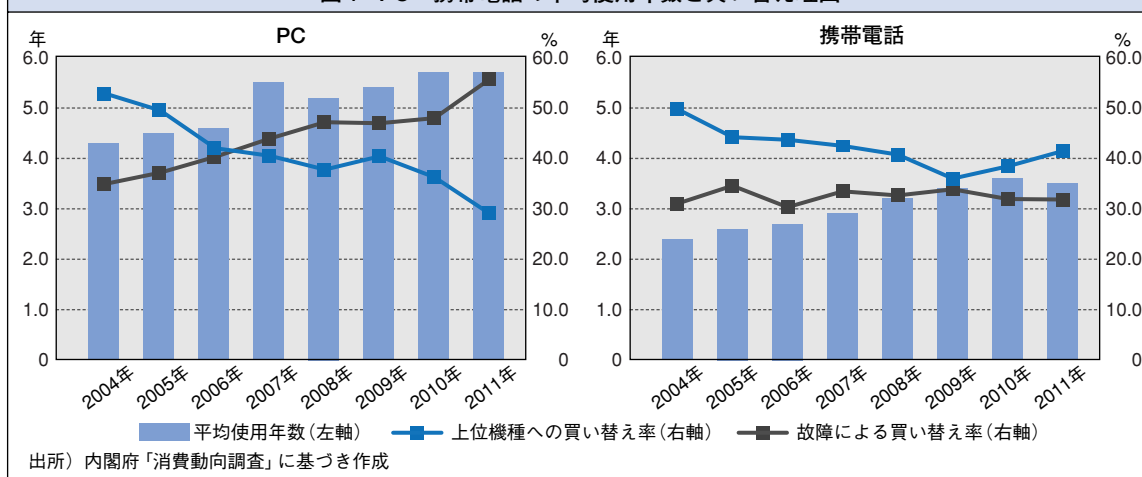
内閣府が実施している消費動向調査でも、スマートフォンの急速な普及の様子が見て取れる。これによると、PCの買い替え理由の大

半は使用年数の長期化による故障であるのに対して、携帯電話の場合は上位機種にするための買い替えの方が多い。2009年以降は上位機種への買い替え率が上昇していることから、携帯電話からスマートフォンへの買い替えが進んだことが推測される。（図1参照）

スマートフォンやタブレット端末などのスマートデバイス（用途の広い多機能な情報処理端末）の普及に伴って、Webサイトの閲覧方法も現在の主流であるPCからスマートデバイスへとシフトしていくことは確実であり、多くの企業がスマートデバイス向けWebサイトの構築を急いでいる。

PCからスマートフォンへの閲覧環境のシフ

図1 PC・携帯電話の平均使用年数と買い替え理由





トはすでに始まっており、スマートフォンやタブレット端末に加え、数年後にはテレビでのWebサイト閲覧が本格化する可能性がある。

今後、数年の間にWebサイト閲覧のマルチスクリーン化（PC、スマートフォン、タブレットなど画面サイズが異なる複数種類の端末の利用）がさらに進み、多様な閲覧環境を手にしたユーザーに対して均質な体験を提供できるようなWebサイトを構築していくことが求められる。

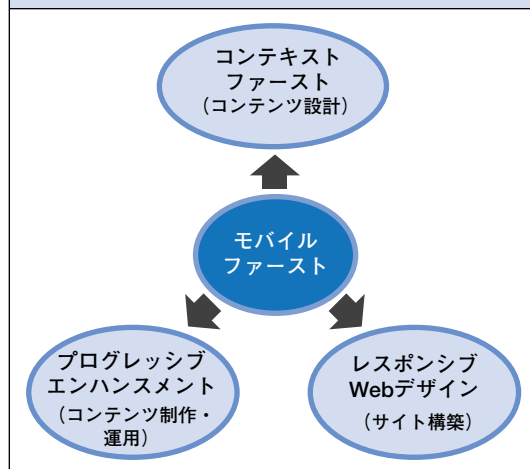
「モバイルファースト」の実践に必要な3つの概念

これから数年のうちにWebサイトの閲覧環境がスマートデバイスへと大きくシフトしていくと予想されるなかで、モバイル機器を優先対象とした設計思想である「モバイルファースト」（Mobile First）の実践が不可欠になる。そのためには、以下の3つの概念をWebサイト設計に取り入れることが必要である（図2参照）。

① コンテキストファースト

スマートフォンやタブレット端末の登場は、Webサイトを快適に利用できる場所を自宅や会社のデスクトップから屋外へと広げ、これまで以上にさまざまな場所でWebサイトを利用できるようにした。そこで、Webサイトを利用するコンテキスト（Context。文脈＝利用状況）を第一に考慮する「コンテキストファースト」（Contexts First）が注目されるよ

図2 「モバイルファースト」に必要な3つの概念



うになった。

コンテキストファーストとは、TPO（時間、場所、場合）を重視し、個々のユーザーの属性に応じてカスタマイズされた情報を、ユーザーの置かれた利用状況を考慮して提供するコミュニケーション設計手法である。

② プログレッシブエンハンスメント

Webサイトは、広範に利用されるという性質上、ユーザーの閲覧環境がどのようなものであっても、伝えたい情報や機能は確実に提供することが必要である。その上で、より高機能な閲覧環境を持っているユーザーに対しては視覚的なデザイン表現や快適な操作性などを通じて豊かな経験価値を提供しようという考え方が「プログレッシブエンハンスメント」（Progressive Enhancement）である。

③ レスポンシブWebデザイン

「レスポンシブWebデザイン」（Responsive Web Design）とは、これまでのように機器

の種類に応じて複数のWebサイトを構築するのではなく、閲覧する機器の画面サイズに応じて最適なレイアウトやデザインでコンテンツを表示するための手法である。

3つの概念を導入したWebサイト設計

ここでは、上記の3つの概念をWebサイト設計に反映させた「モバイルファースト」によってWebサイトがどう変わるかについて述べたい。

(1) コンテキストファーストによる“おもてなし”の実現

コンテキストファーストによるコミュニケーション設計について、ショッピングサイトを例に考えてみよう。

ショッピングサイトでは、利用時に登録されたユーザーの属性情報や、購入履歴や閲覧履歴に基づくリコmend（ユーザーが興味を持ちそうな情報を選択的に表示する）機能が実装されることが多い。通常は、ユーザーがいつどこで利用してもリコmendの内容は同一である。

コンテキストを考慮した場合、利用している時間帯や利用場所（位置情報）などによりリコmend機能を停止したり、表示する情報の内容を変えたりすることで、ユーザーの状況に応じた対応が可能となる。例えば、通勤時間帯の移動中の商品購入利用に対しては商品の訴求を控えるなど、ユーザーの状況に応じた柔軟な対応を行うことが可能である。

このように、ユーザーのコンテキストに着目すると、実店舗での接客のような“おもてなし”を実現することが可能となる。

スマートフォンに関しては、GPS（全地球測位システム）やカメラのほか、各種センサー、NFC（Near Field Communication：近距離無線通信）リーダー／ライター、音声認識技術などユーザーが置かれた状態を察知する技術の発達が今後ますます期待できる。それによって、これまでよりも質が高く広範なコミュニケーション設計を行うことが可能となるだろう。

(2) プログレッシブエンハンスメントによるクロスブラウザー対応からの脱却

2010年にWindows 2000のサポートが終了した時、企業の業務系アプリケーションが最新のOS（基本ソフト）では使えなくなるという事態が発生した。それにより、業務系アプリケーションの設計方針や保守方針が、利用する環境の進歩に追い付けないという問題が浮上した。

これまでのWebサイトの構築や運用においては、PC向けのWebブラウザーが後方互換性（新しいブラウザーが古い規格にも対応すること）を確保していることに加えて、Webサイトの設計・制作時に「クロスブラウザー」（複数のブラウザー）に対応することで、どのブラウザーでも同じ体裁で情報を表示させることができていた。これは、PCの買い換えサイクルの長期化や更新の煩雑さから、旧世代の

ブラウザを使い続けているユーザーの比率が減らないからであった。

しかし、今後数年の間に、Webサイトの閲覧環境に大きな変化が起こることが予想される。これに対応するWebサイト構築に必要なのがプログレッシブエンハンスメントである。

中長期的な観点からも、プログレッシブエンハンスメントはクロスブラウザ対応に割いていたWebサイト構築や運営における負荷を低減させることができる。そのため、ビジネスの目的にかなったWebサイトの企画・設計に、これまで以上に力を入れることが可能になる。

(3) レスポンシブWebデザインによるシステム投資の効率化

これまでのWebサイトは、PC向け以外にも、日本独自の発展を遂げてきたフィーチャーフォン（通話とメールの機能のほか、カメラやワンセグテレビ、Webサイト閲覧などの機能を搭載している従来型の高機能な携帯電話）向けのサイト、スマートフォン向けのサイトなどを別々に構築する必要があった。

それら複数のサイトのコンテンツを効率的に管理・制御することを目的に、多くの企業でCMS（コンテンツマネジメントシステム）が導入されている。CMSは、Webサイトを構成する文書や画像などのコンテンツを統合的に管理し、ページの編集や更新などの処理を行う機能を持ったツールである。

新しい種類の機器が市場に投入されれば、

それに対応するためにCMSの改修が必要になる。レスポンシブWebデザインを採用した場合の最大の利点は、CMSの大規模な改修が不要となり、さまざまな画面サイズの機器にいち早く対応できることである。

また、CMSを利用するしないにかかわらず、1つのシステム上で実装することが可能となることから、システムROI（費用対効果）の大幅な向上にも寄与できる。

なお、レスポンシブWebデザインはマルチスクリーン対応の手段であるためさまざまな解像度に対応する必要がある、技術的な課題として表示速度の遅延が指摘されてきた。しかし、近年はWebサーバー側の技術を組み合わせることにより遅延に対応することが可能となってきたため、ここ1～2年で採用する企業が増えるなど注目度が高まっている。

中長期的なWebサイト戦略の策定を

上記のように多様な閲覧環境に適応したWebサイトを設計する上では、本稿で紹介した3つの設計概念を含め、新しい考え方や構築手法を積極的に取り入れたWebサイト戦略の策定が必要となっている。

NRIネットコムでは、中長期的なWebサイト戦略策定や、Webサイト改善コンサルティング、フレームワークを活用したWebサイト構築から運用・改善までのサービスをワンストップで提供し、企業の「モバイルファースト」の実践を支援している。 ■